

社会科学古典資料センター創設期の回顧

Memoirs on the prehistory of the Center for Historical Social Science Literature

岡崎 義 富
OKAZAKI Yoshitomi

1. 一橋大学の西洋古典資料

一橋大学の所蔵する西欧の社会科学古典資料が、その質及び量において高い評価を受けていることは周知の事実である。一般に、図書館資料の内容は、いうならば図書館に対する大学の姿勢ないし態度の、大袈裟に言えば現象形態であり、多かれ少なかれその中に研究活動の軌跡をも含んでいる。一橋大学の社会科学古典の集積は、1921年のギールケ文庫、続く1922年のメンガー文庫の入手によって、その核ができ上がったといえるであろう。これら文庫の収集の苦心や震災での難を免れた経緯については「一橋大学附属図書館史」などによって多く語られている。これら個別具体的状況を別として、この時期は、既に細谷教授により「経済セミナー」300号で指摘されているように、日本の経済発展と、第一次大戦後にヨーロッパを襲ったインフレーションを背景にして、文庫の顕著な流入が行なわれた第一期にあっている。このころには、一橋大学だけではなく、多くの優れた文庫が日本にもたらされた。同様に、フォルジャーによるシェークスピア・コレクションの例を引くまでもなく、アメリカの大学図書館にとっては、当時なにもせず図書館購入費が急激に増加したのと同じ実質効果があったことを米国大学図書館史がところどころで報じている。経済発展もさることながら、明治期における西欧価値観の急速な受容に対して、大正期は、さらに研究の実質化が進行し、優れた日本人が海外において活躍し、資料に関する情報交換も盛んに行なわれた時期であり、何でもみるの一般遊学から、留学へ、さらに研究協力の展開の端緒であったといえよう。まだ、各大学で西歐文献について、あまり資料的重複など気にしなくてもよい時代でもあった。

第二の文庫流入期がやってきたのは、いわゆる外貨減らしのために文部省による外国の文化財への投資が行なわれたころである。大型コレクションに対する特別予算措置がとられたし、さらに、この時期には、伝統ある大学で創設100年記念祭を迎えるところが記念事業としてコレクションの購入を図るケースがそここみにみられた。前者で一橋大学は、フランスを中心とする近代ヨーロッパの社会科学貴重書を購入し、また、バート・フランクリン文庫購入の一つのインパクトを得たのは後者の理由による。バート・フランクリン文庫の量は、文庫の規模として、20000点を越えるもので、ギールケ文庫、メンガー文庫に加えて、再び巨大な文庫を背負いこんだことになる。購入の経緯については、当時の都留学長が同じく「図書館史」で述べられている。バート・フランクリン文庫が搬入されたのは、1974年春浅いころであった。それは、図書館正面玄関に入って右手の仮書庫に詰め込まれた。この話題は、米国でもかなり知られていたようで、まもなくMITのC.P.Kindleberger博士が突然あらわれた。博士は、経済学者として、また自称する「ある程度の経済史家」としての目でみた経済文献に強い世界の図書館の調査旅行中であった。博士は、一橋大学の文献量に驚愕の声

をもらされた。そして秋になると「経済学者による図書館の利用」と題するワーキングペーパーが送られてきた。1975年のInternational Economic AssociationのConference on The Organization and Retrieval of Economic Knowledgeで発表するとのことであった。そのペーパーでは、一橋の蔵書に大きな評価が与えられていた。身動きもつかぬようなフランクリン文庫の仮書庫のなかで、MITも場所がないとか、フランクリン文庫の整理が大変だろうなどと同情し、かつ激励してくれたことを覚えている。博士はメンガー文庫、当然ながらシュンペーターのコレクション、特に、そのいわゆるイエローペーパーに大いに関心をもたれたことも記憶している。この文庫に所属する資料にはシュンペーター自身がイエローペーパーに速記で書き込んだメモが多数挿入されている。

2. 図書館のスペース問題と古典資料

フランクリン文庫の量的衝撃は、図書館の収容スペース問題を極限状況に追い込み、どうにもならない状態となった。そもそも、国立の現在の土地に、図書館が竣工（鉄筋建728坪、延1844坪、書庫延520坪）したのは、1930年である。東洋一の大学図書館が建ち、その経費の大きさに国会で質問がでたと当時の一橋新聞が報じている。

国立の新図書館の書庫は、20万程度の収容力が予想されていた。しかし、この新キャンパスに移転すると同時に、新しい分類表が採用されることになり、より細分された分類項目は、配架上、加速度的にスペースの必要性をました。国立大学図書館の書庫増築には、いわゆる資格面積と称する積算の基礎があつて、書庫が詰まってきた、かつその他の要素が加算され、一定の基準を越えたとき、ある程度の先を見通して予算措置されるのが一般原則であった。狭溢になった状況では、日常的に書庫内における資料の移動がともない、それが、脆弱化している資料にどんな影響をもたらすかは明らかである。第一期の増設書庫が竣工したのは、1964年である。その書庫は、いわゆる在来の書庫（旧書庫）に対して直角（東西）に延びている。施設当局の原案は、旧書庫に対して並行させて南北に建て、数箇所ですれをたぐものであった。

しかし、当時の川崎事務長は、東西案を強く主張した。それは、第一に、自然光を十分壁に受けることを希望したのである。川崎事務長の頭には、閲覧スペースのバランスからいっても、書庫の延長は旧書庫の後ろに東西に3棟までで、それも、南から、北へ順次階層を高くしていく構想なのである。これは、すべての書庫の南面が、十分に陽光を受けるようにする考え方であった。直接の陽光が資料の酸化を促進することはいうまでもない。当時、5階建の旧書庫は、構造的に、最も利用頻度の高い一般分類の和書を出納台と同じフロアである中層の3階に配置するために、禁帯出の貴重書、また、頻度の高くない独立した文庫などは、1階または、5階に配架される必然性があつた。1階は、周りの樹木からも影響を受け、非常に湿度が高く、そこにメンガー文庫がおかれていた。一方、5階のフロアは、スタックによって支えられているいわゆる積層式のもので乾燥が激しい状態であった。そこに、ギルケ文庫が配架されていた。当時としては、あたりまえだとしても、資料の保護対策は、盗難防止のための窓の鉄枠と、火災のときに、ファイアーカーテンが窓に自動的（あまり信頼性がない）に下りるだけのものであった。夏の曝書のほか、温度湿度の調節など及びもつかなかった。川崎事務長は湿度計を用意した。しかし、いわば病状の診断はできても、治療として打つ手はなかった。自然に頼ろうとする川崎事務長の心情もまた当然のなりゆきであつ

たと今にして思うのである。1960年代になると書架に収まらない資料がフロアに横置きの状態であった。このころの大学図書館の蔵書の増加率は、5%~7%位で、10年では倍になる勢いである。スペース問題は、図書館の日常的問題である。それにしても、新しい図書館ができた竣工式に、次の図書館をどこへ建てるべきかを挨拶に組み入れた館長があつて翬壁を買った話がアメリカにあるが、その迫力に感服する。一橋大学の建物について、そのモデルの片鱗をゲッチング大学においてみたという人がいる。ビルディングの時代的流行や外観はともかく、一橋大学図書館の旧書庫と、閲覧及び整理部門の間は、狭い通路で連節されている典型的なボトルネックというか、砂時計状になっている。これは、そもそも、書庫と閲覧部門を分ける、出納式を基本とした構造なのである。それはかつてドイツが誇った、検索手段としての目録の有効性を前面にだして、情報のアプローチは、目録によることがベストであるとする方式を具体化している出納式固定配架構造なのである。これに対して、一般に、十進法分類や、国立移転に際して取り入れた展開式分類は、利用者が書庫内での検索を意図しているもので、前者とは比較にならないスペースを必要とするものである。本来、構造的に差違があつたのである。大学院生が書庫にはいるようになったのは1968年になってのことである。1964年になって悲願の新書庫ができた。メンガー文庫をはじめ、一般貴重書、和書貴重書を含め、すべてがその4階に納められた。

3. 一般貴重書とその整理

一般貴重書というのは一橋大学図書館での呼び名で、1850年以前の出版にかかる西欧文献のコレクションである。この経緯は、戦時中、資料を疎開するときにとられた処置がその発端である。メンガー文庫、ギールケ文庫のような、貴重な独立した文庫は、疎開する対象として決定するのは容易である。しかし、一般の資料について、全資料を疎開できないならば、なにを疎開するべきかが問題となる。一冊一冊の図書を個別に判定する作業を短期的に行なうことは事実上不可能である。そこで、焼失した場合にその補充が困難なことが予想される1850年以前に出版された洋書を機械的に一般分類に配架されている資料から抜き出して、それを疎開したのである。疎開から戻された後も、そのまま一般貴重書として別置し、禁帯出とすることになった。以後それが新規に収集された図書でも、この方法が踏襲されている。貴重書としての時代的一般基準として1800年以前とするのが普通である。また、英米目録規則でも初期刊本として記述の特別扱いを「1821年よりも前」のものとしている。50年の開きがあるが、このときの判断はなかなか適切であった。

一橋大学が日常的に収集した蔵書とすれば、これこそ、大学の研究の軌跡を反映しているといえる。一体、この部分を鳥瞰できる目録はあるのかとする問題が提起され、丁度そのとき「本邦における経済学の古典の調査研究」のプロジェクトに参加協力することとなった。また、百年祭の記念事業の一環としてもこの調査事業が認められ、recatalogingの作業を砂川淑子氏と担当することになった。一般貴重書の目録は、1976年に刊行された。メンガー文庫、ギールケ文庫を含む将来の古典総合目録について語られたのもこの時代であった。

1970年代前半に当然ながら、スペース問題は次の恐慌を確実なものにした。そこで、一橋大学のように西欧の社会科学古典を大量に所蔵している図書館は我が国に類を見ない、そのなかには、世界的にも貴重な本が含まれている。その資料の保存は、社会的責任でもある。この点を大いに評価してもらって、他の国立のどの大学図書館もスペース問題の悩みは同じ

であろうが、早期の予算配分について特別の処置がなされるよう働きかけを行なった。結果的に、増築計画は、比較的早期に認められたけれども、早いだけであって、古典に対する特別の保護設備などは経費が十分に認められた訳ではなかった。背に腹は変えられない現実がそこにいつも座っている。いよいよ予算処置が講ぜられ、昭和52年3月(1977)竣工予定で本格的な「貴重書書庫」の建築が着手された。

4. 貴重書書庫の建築

筆者は1967年から1968年の海外出張で、幸いなことにロンドン大学のゴールドスミス文庫、ハーバード大学のクレス文庫をはじめ相当数の貴重書コレクション、及びその部門の施設設備をみる機会が与えられた。(さらに詳しくは、このセンターのStudy Series No.9で、川原和子氏が記述している)そのようなイメージがあったため、伝統の違いとはいえ、建設にあたって、理想と現実問題のギャップには相当のものがあつた。

先ず第一に、増築は原則的に過密緩和策として認められたのである。しかし、一橋のもつ貴重書の量及び質は認めるところである。そのためにある程度のプラスアルファを措置するというものであつた。本来の貴重書書庫には、いくつかの基本的な要件がある。自由接架とは異なり、資料は、禁帯出であることはいうまでもなく、出納は専門の職員による。そこで、閲覧室と、書庫は別になり、接架による検索とは対蹠的構造になる。その利用者の不便とひきかえに、資料の良好な状態を確保して、保存の責任を負うことが優先する。そこで利用者に対しては目録による情報検索機能が十分に提供されることが必要となろう。さらに加えるなら、館外貸出をしないで、長期の連続的閲覧に支障がないように、それに相応しい利用者のための快適な居住空間も必要であろう。保存のため資料は、損耗を及ぼさない十分なスペースで保存されること。資料に悪影響をもたらさない採光、温度湿度の調節などが貴重書書庫の要件である。どう考えてもこのような条件の設備は、本質的なもので、プラスアルファの処置程度のものではない。実現の可能性は難しいと思われた。

実際の建築段階においては、第一に閲覧の場所と整理部門は、1階に配置され、移動可能な置きスタックは特別な木製のものを注文することになった。ロンドン大学のゴールドスミス文庫は、やはり、ガラス戸つきの木製のスタックがならべてあり、閲覧者は、重厚な古典が醸し出すそこはかとな緊張感のなかで勉強できるように、みごとな演出があつた。できるならば、少しでもそれに近づきたいという思いがあつた。ハーバード大学のクレス文庫は、同様に閲覧者が本を直接みることができるよう、やはり閲覧機の周囲にスタックが配置されていて、そのスタックには、網戸がかけられている。本の出納は職員によるもので、また、そこに展示されているものが文庫のすべてではもちろんない。

第二の条件として採光である。一般に、太陽光をはじめ、人工光であっても強い光が紙質の悪化を来すことは当然である。そのため通常は、図書館の他の部門よりも、貴重書部門はルクスを落としているのが普通である。コントロールが可能なように無窓のところが多い、これはまた空調についてもいえることである。当時、そのような設備が求められる状態ではなかった。そこで、居住空間としての1階は、結局窓を大きく、いくらかの展示も可能な形となった。

第三に、本来の空気調節は、いうまでもなく、恒温、恒湿を保つことができるものである。保存問題について、紙の劣化条件に関する研究も進み、米国の図書館の保存条件で平均温度

25℃、相対湿度（RH）50%を1とした場合、平均温度35℃で、RH70%の場合、0.14となり、一方、平均温度15℃で、RH10%の場合は、その指数が20.70となるなど研究結果が既に発表されていた。この差は実に、注目すべきもので、1単位を1世紀と考えると、14年から、ゆーに21世紀にもわたるものであり、温度・湿度を下げることによっていかに悪化の速度が落ちるか、その保存に及ぼす効果は明かであるとされている（Hudson, F.H.1976）。この条件の実現などは及ぶべくもなかった。しかし、当時の施設当局の大変な努力で、暖冷房機が設置された。いってみれば、家庭用の暖冷房機の規模を大きくしたようなもので、決して、恒温恒湿などの機能を期待できるものではないのである。それでも大いに活躍して、資料の移転の前にはフル運転して、コンクリートの乾燥に力があつた。しかしまた、困ったことも起きたのである、このことは後述するとして、建物は、約1年間乾燥された。

さて、乾燥している間に、資料の移動計画が検討された。棚数の計算とその新貴重書書庫における配架位置を決定した。このときの一つの事件は、旧書庫との接続の通路が閉鎖されるというのである。通路で接続する場合は、その両側の防災設備の基準が同等の条件でないといけないとのことであつた。旧書庫のそれが、新貴重書書庫のそれにあわないことなど説明の必要がない。開閉式の防火扉をおいても条件は同じであるとのことであつた。壁でふさがれたこの通路も一年経って、これも施設当局の努力で開けられた。多くの問題をかかえつつも、とにかく蟻のものはこびのごとく、図書館員総出で資料の移転が行なわれたのは1978年1月である。

さて、果敢に働く冷暖房装置は、果敢さゆえに騒音をも排出した。これは、かなりひどくて研究や仕事に余りよい影響を与えない。さらにこの機器は、送風装置があり、運転すると書庫内をかなり強い風が還流するのである。これは、通路側にある資料がひどく乾燥する状況を生みだした。かなり厚い表紙のもので、通路側の上段に配架された資料は、外側に反るような状況が見受けられた。いまは、当然使用されていないが、当時は大いに慌てたものである。

5. フランクリン文庫の整理とCarpenter氏の来日

前述したように、未整理書庫に詰め込まれ整理されていたフランクリン文庫、正式にはBurt Franklin Collection-Donated by Mitsui Group Companiesも新貴重書書庫1階に移された。整理の継続と、閲覧業務を進めるためである。都留学長は、この文庫の購入に当たって、創立100年の記念事業として基金の募集を構想されていたが、最終的には、国費一部負担と、三井物産をはじめとする三井系22社の拠出によって賄われることになった。三井グループは寄贈について条件を設定したわけではないが、一、二年の内に文庫の内容が概観できる目録を作成して提出して欲しいとのことであつた。文庫受入れの記者会見は1975年2月であつた。20000冊の本は、平均の年間増加図書冊数に匹敵する量である。そのうえまだ一橋大学に所蔵したことのないマニユスクリプトが多数含まれているなどの課題があつて、何らかの援助を必要とした。これも都留先生のお声がかかりで、ハーバード大学のクレス文庫から、文庫のキュレーターであるE.S.Carpenter氏を呼ぶことになった。同氏は1975年の夏、奥さんと子ども3人の家族連れで来日された。宿舎はICUの職員宿舎を斡旋してもらった。その宿舎は閑静な林のなかにあつて、藪の中で「うまおい」が激しく鳴いていた。夫人はなにかの鳥と思われ、虫であることが信じられない様子で、何度も問い直されたのをよく記憶している。

Carpenter氏は、私にとってはじめての人ではない。1967年、クレスを訪ねたとき、日本では経済学史の研究者に評判の高かったそのDorothea D.Reevesに代わる次期のキュレーターとしてバトンタッチしていた人である。

三井グループに提出する目録は、たとえ、Preliminary Catalogueとはいえその作成は期限の限られた仕事であった。Carpenter氏は、翌年6月、まだ新書庫が開館しないうちに帰国された。氏の帰国後も松尾恵子、中野悠紀子両氏の奮闘は続いた。増淵龍夫館長にきつい催促を受けながらなんとか印刷（1978）にこぎつけ三井物産の本社に持参した。

6. 社会科学古典資料センターの創設

1978年4月になって、一橋大学社会科学古典資料センターとして独立した組織が設置された。制度的には学内共同利用施設である。センター長は附属図書館長が併任で、初代の専任教授として、細谷教授が赴任した。いわばハードというかインフラストラクチャーのやり繰りに浮沈した古典のコレクションもさらに有機的な管理体制と高度の利用を促進する、ソフトウェアがはじめて導入されたといえよう。このことについては、別項、細谷教授の論文に詳しい。また、センターの英文名称について、古典をギリシャ・ラテンと区別してThe Center for Historical Social Science Literatureとする提案をされたのはCarpenter氏であった。

7. 古版本の修復とマイクロフィルム化

繰り返すが、書物を移動すれば、壊れることは明かだ。脆弱化した古版本については特にそうである。手入れなど十分にできない。メンガー文庫、ギールケ文庫が、疎開によって傷ついたことに注目し、昭和29年両文庫修理のための特別経費の配付を受けたことがある（図書館史p.70）。当時、名人といわれた職人がそれにあたったが、材料、修理期間、人件費の積算など、いろいろな問題があった。またいわゆる諸製本と称する技術は、我が国ではそれを支える基盤をうしないかけて末期的症状を呈していた。その結果には多くの悔恨が残った。貴重書書庫に移された資料に、補修、修復を要するものが少なくない、しかしそれを行なうのはもはや不可能に近いと当時思われた。

そのころである、Carpenter氏からExploring New Vistas in History and Economics: The Goldsmiths'-Kress Library of Economic Literatureと称するパンフレットが送られてきた。いうまでもなく、Research Publicationsが企画したGoldsmiths'-Kress Libraryマイクロフィルム版のアナウンスメントであった。これは、一つの朗報であった。これ入手できるなら両文庫の極めて強力な英語文献分野は、一橋大学の古典について、さらに強力な資料的補完をすることができる。メンガー文庫をはじめ、重複する部分は、現物の保護、またコピー利用に便であること、即ちメディア変換である。それにカードカタログがついている。おそらく、資料的にGoldsmiths'-Kress Libraryに含まれる可能性の低いドイツ文献の管理に集中的にエネルギーを割くことができるなどの考えが浮かんだ。Research Publicationsは米国で図書館協力による新聞の共同保存を広く手掛けている法人である。幸いに特別予算の配付を得られて、古典情報の充実もでき目録情報もかなりリッチになった。Research Publicationsは、Goldsmiths'-Kress事業のあとメンガー文庫のドイツ語文献をマイクロフィルム化する企画に大いに興味を持ったと仄聞している。いま、丸善によるメンガー文庫のマイクロフィルム化事業が進められていることを知り、ひとしお感慨が深い。

いうまでもなく、蔵書の評価に、コレクションvalueと、個別の資料valueが考えられる。メンガー文庫もメンガー自身のワーキングコレクションとして収集されたことは明白である。メンガーは単なるレアブックのコレクターではない。本の扱い方からもそれは明瞭である。しかし、その中に世界的に見ても希少価値の高いものが多数あることも確かである。コレクションvalueを認めつつも、なおその中で特に貴重な資料は、さらに別置して、小規模の完全保管ができる設備をつくることなら可能性はあるのではないかと当時思ったりした。資料管理の都合から一元的な原理で考えやすいが、個別の判断が、やはり常に必要なことと考えている。また、コレクションvalueをメンガー文庫に認めるなら、息子のメンガー博士（Karl Menger）から、所有している父（Carl）の文庫の哲学部分を譲る話があったとき、購入できなかったのを今でも残念に思っている。ましてや、それらの書物に父の書き込み、いわゆるMengerianaが随分あると聞いてなおさらのことであった。

（兵庫教育大学学校教育センター教授）